

小檜山博



博山檜小

社談講



雪嵐 ゆき あらし

昭和六十一年六月十日 第一刷発行
昭和六十一年十月三日 第二刷発行

著者——小檜山 博 こひやま はく

© Haku Kohiyama 1986, Printed in Japan



発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三—九望—二三(大代表)

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一一〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

雪
嵐

黄緑におおわれた山腹のあちこちにコブシが雪を散らしたように浮いている。ヤマザクラの花も濃くなりはじめていた。その森の奥からウグイスの声が聞こえた。

道ばたに咲いているタンポポの群れが陽の光をはじいてまぶしい。坂を登りきって火の見やぐらを過ぎると腹をへらした豚の鳴き声が聞こえはじめ、ぼくは肩から斜めに下げている鞆を手で押えて走り出した。ブリキの筆入れの中で鉛筆やナイフが鳴った。

村道からそして家のほうへ曲がり、馬小屋のわきを通って母屋の玄関へ走り込む。低い声で、ただいま、と言う。返事はない。みんな畑へ出て誰もいないことはわかっていた。土間から、茶の間の出窓に置いてある置時計を覗く。三時半だった。

上がりがまちへ鞆を投げ、また外へ走り出た。馬小屋のまわりで五、六羽のロックのニワトリが餌を探している。ときおり両足で地面を二回くらいずつ引っ掻いては、すばやく嘴でつつく。ほかの三羽は巢で卵でも産んでいるのかもしれない。母屋の裏口へまわり、大鍋に煮てあ

るカボチャや澱粉粕の餌をひしゃくでバケツへ汲んだ。

それを持って豚小屋へ走る。屋根にとまっているカラスが狡い声で鳴く。また豚の餌を盗むつもりなのだ。二頭の豚はぼくを見るとき、そう鼻を高く鳴らし、金属でもこすり合わせているようなやな声で鳴いた。うるさいなあ、いまやるっちゃうの、とぼくは豚の頭を軽く叩いた。敷き藁が汚れて泥田みたいになり、豚が歩くたびにズボズボと湿った音がした。後ろに積んである麦殻の束をほどき、餌を食べている豚の背中の上へ投げ込む。軀が見えなくなるくらい麦殻をかぶせても、豚は平気で餌を食べつづけた。それが可笑しくてクスクス笑った。

家の裏口へ戻って台所へ上がり、出しっぱなしの食卓に載っているジャガイモの塩煮を大急ぎで口へ押し込む。窓から草っ原につないである綿羊が見えた。腹の大きい二頭の牝は、坐って遠くの山のほうを見ていた。間もなく子どもが生まれるのだ。ほかの五頭の牝は草を食べていたが、一頭だけいる牡がそれらの牝の尻のにおいを嗅ぎまわっている。つないである綱がいっぱいに張って棒みたいだった。牡が一頭の牝の尻へ乗るかかりかけ、後ろ脚で立ち上がったところで綱に引っぱられて倒れた。牝が小走りで逃げる。

間抜けが、とぼくは声をたてて笑った。口いっぱいに詰め込んでいたジャガイモが喉につかえ、水甕から汲んだ水をひしゃくのまま飲む。頭の中にまた、杉山和也の口を歪めた笑い顔が浮かんできた。ぼくより一級上の小学六年だった。昼休みに相撲をとっていて、ぼくがやはり一級上の常雄に勝ったとき和也が、ヤブニラミのくせによお、やるんでないか、と笑ったのだ。まわりから何人かの女生徒の笑い声も聞こえた。

ぼくは生まれつきひどい斜視なのだった。片方の眼でもを見つめると、もう一方の眼球が眼尻のほうへ極端に寄ってしまった。

ジャガイモを六つ食べ終えてから、茶の間と台所の床板の雑巾がけをする。土間にたまっている土や砂を帚で掃いたあと、外の風呂小屋にある手押しポンプからバケツで水を汲んできて台所の水甕をいっぱいにした。ついでに五右衛門風呂へも水を汲み入れる。

台所へ上がって鉄鍋に麦を一升とぎ、ストオブへかけてから薪に火をつける。米と麦を最初からいっしょに炊くと軟らかい米だけ先に煮えてしまうため、麦のほうを一度、先に煮ておくのだ。米は三合といで水にうるかした。水かげんは母ちゃんから教えられたとおり、米の上へ手のひらを伏せて手の甲が隠れるくらいにした。

外へ出ると空がうっすらと橙色だった。太陽が西の山頂に載っていて、向こう側へ転げ落ちそうに危なっかしく見えた。道路の向こう側にある森林鉄道の線路を、汽車が通ってゆく。ちっぼけな蒸気機関車が、丸太を山盛りに積んだ台車を十台も引っぱっていた。雪のない期間だけ、一日に二、三回、山奥とマチ場を往復するのだった。

原っぱへ行き、つないである綿羊を腹の大きい牝から先に一頭ずつ小屋へ入れる。三百メートルほど離れたところにある隣の家の公次が、村の道をぼくの家へ向かって走ってくるのが見える。白い歯を出して笑っていた。両手にパッチを持っているのがわかる。ぼくより二つ下で小学三年生だった。

牡は最後にした。ぼくが先になると後ろから頭で突かれるため、首に結んだ綱を持って綿羊

の横に並んで歩いた。そばへきた公次が、遊ば、と言った。ぼくは綿羊の力に引きずられながら、遊ぶからニワトリ追い込むの手伝ってくれや、と言った。公次が、よしっ、と言ってパッチを半ズボンのポケットへ押し込みはじめる。畑に散っているニワトリを振り返り、眼で追っている。

ぼくは家へ入って麦の煮えぐあいをみてから、また外へ走り出た。太陽の沈んだところの空が夕焼けだった。その山頂にある太い松の木の枝の一本一本が、黒く浮き出ていた。いつか山へ登り、その木にも登ってみるつもりだった。山の向こうにあるという隣村が見えるかもしれない。両手を広げて中腰になり、蟹みたいに左右に動きながらニワトリを小屋の戸口へ追いたてていた。

ぼくは風呂小屋へ走って行って風呂を焚きつけ、家の表へ戻った。公次はもうパッチを出して、どの絵のものを先に使うか選んでいた。

——由加はこないのか。

ぼくは亜麻で作った半ズボンの尻ポケットに入れてあるパッチを出しながら聞いた。公次の姉で、ぼくより一つ年上だった。パッチは汗でちょっと湿っていた。

——晩ご飯の支度してた。

公次がやっと選んだというふうに、野球の選手の絵がついているパッチを地面へ置いて言った。

——こんど連れてこいよな、おまえだけじゃ、あっぱくさいべや。

わざと乱暴な言い方をした。ぼくは相撲とりの横綱の絵がついているパッチを地面へ置くと、しゃがんでパッチと土との間に隙間ができないかどうか確かめた。頭の底で、オカッパ頭で眼の大きい由加の顔がちらちらした。

じゃんけんに敗けて公次が先にはじめる。つづけて二枚とられたあと、ぼくも二枚とり返した。家へ走り込み、水がなくなっている麦の鍋をストオブからおろして台所へ運び、冷たい水を入れておく。それからこんどはアルミニウムの鍋に水を入れ、ダシのイワシをひとつかみ入れてストオブへかけた。

外へ出ると公次は退屈そうに小石を道路のほうへ向かって投げていた。空中を飛ぶ石が夕焼け色に光った。地面に置いてある二枚のパッチの絵の上を、うっすらした暗さが這いはじめていた。

——あさつての土曜日よ、学校帰ってきてから時夫んちへ遊びに行くべ、ザリガニいっぱいいるんだよ。

ぼくは自分のパッチを持って言った。二カ月前にぼくの家から三百メートルほど学校寄りの山ぎわへ引越してきた家の子供で、ぼくと同級生だった。両親は炭焼きをしていた。

——駄目だって言われてるも。

公次が自分のパッチへ落としていた眼を、ちらっとぼくへ向けて言った。眉が寄っていて、怒ったような顔つきだった。

——誰によ。

ぼくはパッチを公次のパッチのわきへ叩きつけて聞いた。

——父ちゃんにも母ちゃんにもだ。

公次は無事だった自分のパッチへすばやく手を伸ばして言った。ぼくは、ふん、と鼻を鳴らした。時夫の家族が朝鮮の人だからに違いなかった。ぼくはストオブにかけてある味噌汁用の水が蒸発してしまったのではないかと気にしながら、俺、どうしようかな、と言った。公次がパッチを地面へ叩きつけ、村の人もみんな、あの家へは行かないって言ってるっちゅうよ、と言った。

かすかに馬車の車輪が轍を転がる音と、馬の首についている鈴の鳴る音が聞こえた。伸び上がって見ると、川向こうの畑へ行っていたらしい父ちゃんたちが帰ってくるころだった。馬車の箱の中に坐った妹の康子がこっちを見、空へ突き立てた右手の手首から先をヒラヒラ振った。歯を見せて笑っている。ぼくより六つ年下で来年から小学校だった。

手拭でねじり鉢巻をした父ちゃんが馬車の前に坐って手綱を持ち、母ちゃんと兄嫁のミツ姉さんと姉は馬車の後ろから話しながら歩いてきていた。ミツ姉さんと姉は頭に白い布のかぶりをかぶっていたが、母ちゃんだけはぬいで手に持っていた。

——やめるべ。

ぼくは地面から自分のパッチをひろって言った。五枚くらい勝っていた。公次が口を不服そうに尖らせてパッチの枚数をかぞえる。

風呂小屋へ行って湯かげんをみたあと、さらに薪を三本くべる。それから豚小屋のわきにあ

る薪小屋へ行き、小割りにして積んである薪を七、八本かかえて母屋へ走り込む。道路を、公次が小走りに帰って行く後ろ姿が見えた。馬車はもう馬小屋の前へきてとまっていた、父ちゃんが梶棒や鎖の胴引きをはずしているところだった。

——落とってきたから、洗って皮むいとけ。

母ちゃんが土間でモンベや地下タビを脱ぎながら言った。ぼくは運んできた薪を土間の隅にある薪箱へ入れると、うん、と声を出してまた薪小屋へ走った。馬小屋から押し切りで馬草を切る音がしていた。ミツ姉さんとぼくの姉が切っているのだ。稲藁を切る軟らかい音が終わって、デントコオンの殻を切る硬い音に変わる。

晩ご飯を食べはじめて間もなく玄関の車戸のあく音がした。みんなが顔を見合わせて口の動きをとめる。ミツ姉さんが箸を置いて立って行き、茶の間と土間のあいだの板戸をあけて玄関のほうを見る。土間から男の声で、絵をかかせてください、と言うのが聞こえた。しゃがんで膝をついたミツ姉さんが父ちゃんを振り返り、絵だと、と言う。いつも母ちゃんがホイトと言っている人で、絵をかいてもらう代わりにご飯を食べさせるか、大豆などを五合くらいやるのだった。

——いいからって言え。

母ちゃんがひたいに皺を寄せ、小声で言う。ミツ姉さんが土間の暗がりへ顔を向けて母ちゃんの言葉を繰り返した。ぼくは落の味噌汁碗を左手に持ったまま耳をすませた。かかせてやればいいのと思った。母ちゃんが脅すみたいに軽く咳払いする。

またこつちを振り返ったミツ姉さんが囁き声で、帰らんよ、と言う。気味が悪いという顔つきだった。母ちゃんが口を歪めて、しょうがないというふうに首をひねり、上がってもらえ、と言った。すばやく食卓の上を見まわして、何も出すものがないのに、とぶつぶつ呟く。父ちゃんはドブロクの入ったコップを口へ運びながら、ま、入んなさいやあ、と大声で言った。嬉しそうな声だった。客が好きなのだ。母ちゃんのはうが父ちゃんより四つ年上のせいか、こういうときの判断はだいたい母ちゃんが決めていた。

絵かきの男はリュックサックを背負ったまま、炉のストオプのふちへ上がってきた。髪も髭も首まで伸びていて、絵本で見た乞食にそっくりだった。男は膝へおろしたリュックサックから絵の道具を出しながら、すみません、すみません、と言いつづけた。顔は父ちゃんと同じ四十五歳くらいに見えたが、髪は半分くらいが白髪だった。

ぼくは太急ぎでご飯を掻き込むと男の近くへ行って坐り、絵の具や筆をのぞき込んだ。すぐに妹の康子もきて横へしゃがむ。男の着ている鼠色の毛布で作った服から酸っぱいにおいがした。食卓でご飯を食べつづけている姉と母ちゃんが、顔を見合わせて眼くばせする。服のにおいが食べ物に混じるのかもしれない。ミツ姉さんが男にお茶を出して食卓へ戻ったあと父ちゃんが、あんだ、どっからきたね、と聞いた。

掛け軸の大きな紙へ直接、絵の具で松の木をかいている男が、エチゴです、と言った。顔は上げなかった。母ちゃんが箸をとめて男を見る。

母ちゃんの眼がチカチカ光った。それから、おれらは会津の喜多方からきたんだよ、もう二十五年も前になつけど、と言った。いつも母ちゃんは自分のことを、おれ、と言うのだった。男が筆を動かしながら、喜多方なら隣りマチみたいもんだねえ、と言った。抑揚のない声だ。腹がへっているのかもしれない。

男がかいた絵は二枚とも赤松に鷹がとまっているものだった。父ちゃんがそれをぼくに持たせて、こりゃあたいたしもんだ、と顎を小刻みに揺すって眺めた。母ちゃんが、父ちゃん絵なんかわからんくせに、と言って鼻で笑う。

ミツ姉さんが小さいお膳に一人分の食事を載せてきて男の横へ置く。父ちゃんが、ドブも一杯やれや、と言った。

——よかったら、うちさ泊まってけば。

母ちゃんが男にコップを差し出して機嫌のいい声で言う。ぼくは二枚の絵を座敷との境の板戸へ画鋏で貼り、少し後ずさって眺めた。村のどの家にもない上手な絵に思えた。父ちゃんが、風呂へも入ってもらえや、とミツ姉さんを振り返る。男は頭が膝へつきそうなくらいに軀を何度も折り曲げて礼を言っていた。

ぼくは風呂から上がると真つすぐ寢床へ入り、茶の間の話し声に耳をすませた。会津や新潟の話で、ぼくの知らない地名や人の名前ばかり出てきていた。もうすぐ五十歳になるはずの母ちゃんの笑い声が、いつも弾んで聞こえるのが気持ち悪かった。姉が康子に、早く寝なさい、と叱っているのが聞こえた。

ぼくは寝返りをうって蒲団の奥へもぐった。父ちゃんといっしょに寝ている蒲団のため、酒のにおいやおとなの汗のにおいがして少しむせた。板戸が開閉して康子が入ってくる足音がし、横に敷いてある母ちゃんの蒲団へもぐり込む気配がした。

父ちゃんが台所へ向かって、ドブロクなくなつたぞ、と言っている。あんまり飲まんばいいのに、と思う。酔いすぎると母ちゃんと喧嘩がはじまるからだつた。だがきょうはお客さんがきているので大丈夫に思えた。

闇の中で康子が、お姉ちゃんの病気なんたっけ、と聞いてきた。ぼくは怒りつける声で、いから寝れ、と言つた。二年前から紋別の洋裁学校へ行っている長女で、三ヵ月くらい前から病気になって紋別の病院へ入院しているのだつた。肺病らしかった。

またぼくより十五歳上の克男兄さんは、三十キロほど奥へ入つた造材山へ馬を連れて出稼ぎに行つていた。丸太を山頂から麓まで運び出す仕事をしていた。その丸太は、夏のあいだは森林鉄道がマチ場まで運び、冬は何十人もの馬追いがバチという大型の橇に載せて馬に引かせ、マチの木工場まで運んでいた。

兄さんが家へ帰ってくるのは半年に一回くらいだつた。そのあいだ妻のミツ姉さんが二ヵ月に一度くらい、馬草とか漬け物とか着替えを持って兄さんの飯場まで届けていた。ミツ姉さんは嫁にきて四年目で二十六歳だつたが、まだ子供はいなかった。村の人は働きすぎるからだと思つていた。ぼくにもそう思えた。

二十三歳になる次男も、克男兄さんと同じ山へ行つて人夫で働いていた。馬をほしがつてい

たが、まだ買えないようだった。

やかましいスズメの声で眼ざめた。窓の障子の向こうに朝日がたまっていた。横の父ちゃん
は口をあけて眠っていた。金歯が黒く汚れている。ぼくはそろそろと蒲団から抜け出すと、着
る物をかかえて茶の間へ行った。

燃えているストオブの上で味噌汁が煮立っていた。台所でミツ姉さんが庖丁で何かを刻む音
がしている。よく響いた。姉も客の絵かきもまだ起きてなかった。

ぼくは支度をする外へ走り出て草むらへ小便をした。もう空でヒバリが鳴いていた。右手
の山の中腹から白い煙が立ちのぼっている。時夫の家の炭焼窯だった。学校へ行くとき誘いに
寄ろうかどうか迷う。

ニワトリ小屋の戸をあけて中のニワトリを外へ追い出したあと、綿羊小屋へ行って一頭ずつ
に綱をつけて原っぱへつないだ。草の上に載っている露に陽の光が当たり、黄色や紫色に光っ
てまばゆかった。

家へ入ると間もなく公次が学校へ行く支度をして迎えにきた。一人だった。

——なによこんなに早く、もう一回うちへ帰れ。

ぼくは怒って言った。由加がいっしょでないことも面白くなかった。公次はびっくりした顔
をしてまた自分の家へ戻って行った。

ぼくは台所へ出ている食卓へ坐ってご飯を食べながら、ミツ姉さんがぼくの弁当を詰めてい

るのをのぞいた。

——ちよつと米を入れてよ。

寢床の母ちゃんに聞こえないよう低い声で言う。ミツ姉さんが苦笑してうなづく。ご飯は麦七分に米三分の割合いで炊いているので、ぼくが弁当に米を多めに入れると家の者は麦ばかりみたいなご飯を食べることになるのだった。いままでもミツ姉さんは何度か父ちゃんや母ちゃんに、どしたんだこの真っ黒いメシは、と叱られた。そういうときミツ姉さんは、量り間違つて米を少なくしてしまつて、とあやまつていた。ぼくもミツ姉さんに氣の毒だとは思つたが、学校へ行って由加たちの前で麦ばかりの弁当を食べるのも恥ずかしかった。

学校での一時間めと二時間め、ぼくら五年生は自習だった。小学校と中学校を合わせて生徒が百人しかいない併置校で、教室が全部で五つしかないため五年と六年は一つの教室で勉強していた。一年と二年と三年も一つの教室に入れられ、三年と四年で一つ、中学生も一年から三年まで一つの教室だった。屋内運動場などもなく、雨や雪の日は廊下で遊んだ。先生も校長先生を入れて五人しかいなかった。

一人の先生が同時に五年と六年を教えるため、六年生が勉強しているあいだ五年生は自習になった。そして陽子先生は先に卒業してゆく六年生に力を入れて教えるため、ぼくらは毎日のように自習だった。勉強しなくていいことが嬉しかった。

ぼくら五年生は男子が九人に女子が五人しかいなかった。いつも黙って教科書を見ているのに飽きては騒ぎ、陽子先生に怒鳴られたり竹の棒で叩かれた。